

「間メディア社会」におけるメディアの相互利活用

波多野 恵那

近年、特に 20 代において「メディア多様化時代」と呼ばれる現象が顕著になってきている。依然として、国民全体のメディア利用時間は、テレビが最も長いものの、若年層ほどテレビ視聴時間が短く、インターネットの利用時間が長くなる傾向にある。また、そのようなメディア環境の中で、「議題設定」の機能がコロナ禍でのテレビによって担われ、さらにソーシャルメディアがそれに反応して影響力を発揮したと指摘されており、テレビとソーシャルメディアが相互作用しつつ世論を形成する現代のメディア環境である「間メディア社会」が形成されつつある。

そこで、本研究は、「間メディア社会」における多様なメディア、とりわけテレビと SNS などのソーシャルメディアの間には、どのような関係があり、両者はどのように相互利活用されているのかを明らかにし、その効果を考察することを目的として、調査と分析を行った。

調査対象は、ソーシャルメディアへの展開を行っているテレビドラマのうち、第 1 回調査（事前調査）では 2021 年 4 月期の 10 番組、第 2 回調査（本調査）では 2021 年 7 月期の 10 番組とした。調査項目は、平均視聴率、配信サービスの種類とオリジナルコンテンツの有無、公式 Twitter のフォロワー数とツイート数及び詳細な利用状況（1 日のツイート回数、最も活発な利用時間、画像・動画の有無、リンクの有無、ハッシュタグなど）、公式 Instagram のフォロワー数と投稿数などとし、事前調査の結果に基づいて、各番組を、平均視聴率と多メディア活用の程度に応じて、4 群のパターンに類別した上で、平均視聴率率と SNS 活用の関係について、4 群を比較して分析した。

その結果、いずれのパターンにおいても、出演者と SNS を利用する視聴者の年齢層に大きな乖離が無いことや出演者も SNS を利用していることが影響力を有することが明らかになった。また、平均視聴率が高くなかった番組群に属していても、SNS への浸透やタイムシフト視聴において成果を得る番組が存在することや、SNS を単なる情報発信のツールとして利用するだけでなく、視聴者とのコミュニケーションツールとして活用する番組が存在することも示された。さらにタイトルについても、各パターンを通じて、SNS への遡及が重視される傾向も窺えた。

本研究は、「間メディア社会」における多メディアの活用について、その現状と将来性を、テレビドラマと SNS の連携に着目した上、パターン別に類別して明らかにしたものである。対象と時期を限定した調査に基づく研究ではあるが、その成果は、激変しつつあるメディア環境に関する研究において、先駆的な知見となる可能性を有するといえる。

（指導教員 辻 泰明）